

# 山と博物館

第57巻 第4号 2012年4月25日

市立大町山岳博物館



「山岳図書資料館開館テープカット風景」(平成24年4月20日)

(左から、笹本信州大学副学長、牛越大町市長、大町市議会議長、宮本長野県山岳協会会長、古原長野県山岳協会名誉会長)

## 山岳図書資料館の開館に寄せて

宮野 典夫

平成二十四年四月二十日、市立大町山岳博物館の敷地内に山岳図書資料館が開館し、記念式典を執り行いました。式典では関係した皆様とともに開館を祝いました。

本資料館の建設は、山岳博物館の創立六十周年の記念事業のひとつとして取り組んだものです。また、同年に創立五十周年を迎えた長野県山岳協会の記念事業でもあり、建設にあたっては建設費の一部として寄附金をいただくとともに、山岳図書資料を大町市にご寄贈いただきました。

資料館建設の端緒となったのは、山岳図書資料を収集、保管することと、散逸や亡失を防ぐとともに、市民をはじめ登山者や研究者の方々の教育普及や調査などに役立てていただき、より一層の山岳文化の継承と発展を願う長野県山岳協会の方々の熱い思いと、十年前に山岳文化都市宣言を行い、先人たちが唱えた地域文化の集約と発信という原点に再度立ち返りながら、新しい価値観に基づく山岳文化の創出を目指す大町市の考えが相通じ現実化してきました。

収蔵されている資料は整理・登録した後に、長野県山岳協会からご寄附いただいたものを一階に、山岳博物館で所有していたものを二階に納めてあります。主な収蔵資料は欧州山岳雑誌として伝統のあつ『THE HIMALAYAN JOURNAL』『THE ALPINE JOURNAL』等があります。

山岳図書資料館の構造は、鉄骨造り地上二階建て、延べ床面積百十七平方メートルで、書架四十四基や検索用のパソコンなどを備えています。閲覧は博物館の開館時はいつでもご覧頂けます。また貸し出しについてもご相談に応じます。収蔵資料の目録は山岳博物館のホームページ(<http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/>)にてご覧いただけます。

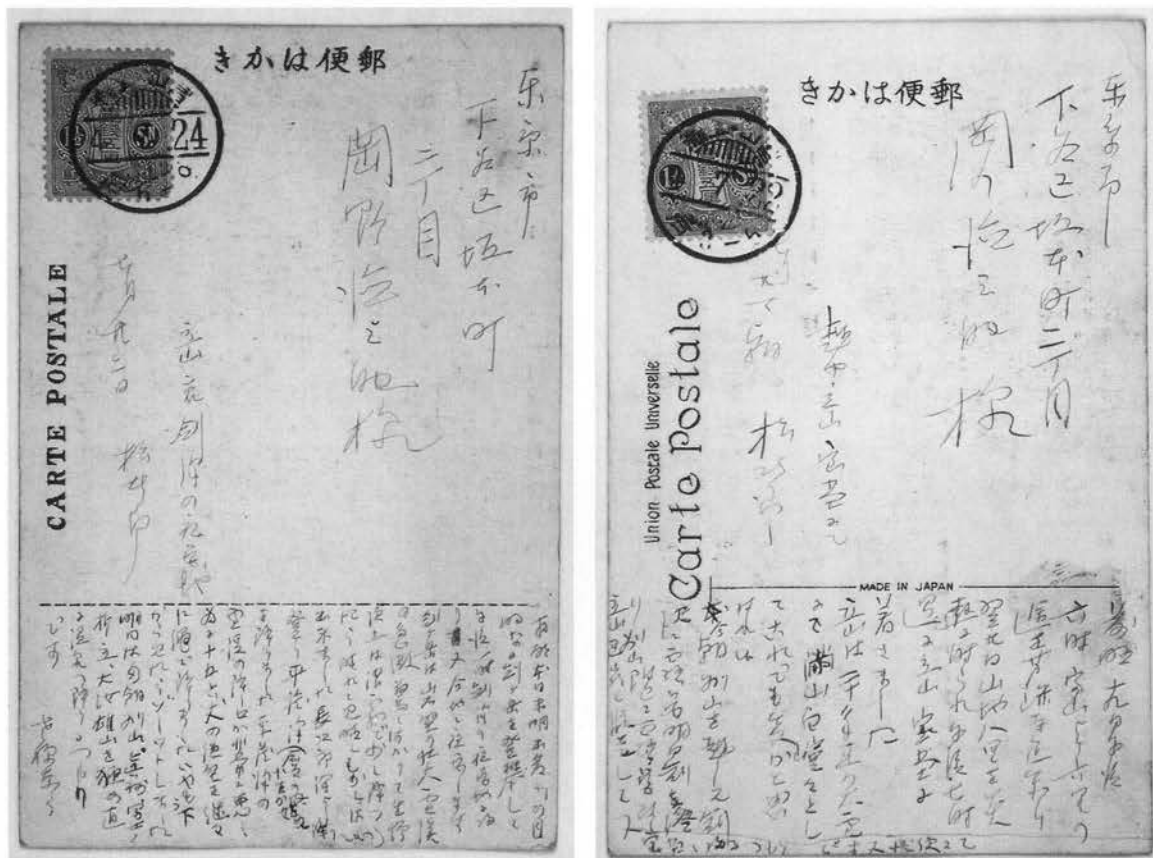
今後も貴重な山岳資料の受け入れや、収蔵資料の活用を進めてまいります。

(市立山岳博物館館長)

# 岳人冠松次郎と大町對山館

## — 大正四年七月劔岳登山の記録 —

中野 守久



冠松次郎が劔岳登山中に岡埜徳之助に出した葉書  
右：1通目 左：2通目 いずれも日本山岳会蔵

### はじめに

本年は記録的な降雪がみられた年であったが、富山と長野の県境附近は世界でも有数の豪雪地帯である。その豪雪地帯を流域とし日本三大雪渓の一つ劔沢を支流に併せもつ黒部溪谷は近代まで人を寄せ付けなかった峻嶒なV字谷で知られている。

冠松次郎（一八八一—一九七〇）は大正末にその黒部溪谷下廊下を初めて完遍した岳人であった。大町は後立山連峰の登山基地として以降頻繁に訪れた冠松次郎（以下松次郎と記す）であったが、對山館主人百瀬慎太郎との交流も相当あったと思われる。

松次郎が初めて對山館を利用したのは紀行文によれば、明治四十四年（一九一一）八月の山行であつたようだ。山行内容は四ツ谷から初めて白馬岳を登った後に清水平まで縦走し黒部の相母谷温泉に降りたもので、この時は松本駅からの馬車の中継点として對山館が利用され宿泊はなかつた。最初の對山館宿泊の機会の後述する大正四年（一九一五）七月の山行時と思われる。しかし、このことは松次郎が著した膨大な著作物等からは窺えない。本稿では、松次郎と對山館との関わりを示す一つの証しとしてその事跡を紹介したい。

### 劔岳初登山と平蔵谷

大正四年（一九一五）七月の山行とは松次郎が初めて劔岳登山を行ったものだ。登山ルートは明治時代に陸地測量部隊によって拓かれた劔沢の枝沢である長次郎谷をつめたもので、登頂後は隣接する平蔵谷を降りた。平蔵谷を下山路としたのは岳人では初めてとされている。日本山岳会には、この山行で松次郎が室堂と劔沢野営地から山仲間の岡埜徳之助に途中経過を

伝えた葉書が二通保存されている。岡埜徳之助（一八七九—一九七二）は上野駅近くで江戸時代から続く老舗の和菓子店岡埜榮泉堂の主人で、松次郎と同様初期の日本山岳会員である。岡埜と松次郎は大正期に奥秩父などへ一緒に出かけている。以下葉書の写真を示すとともに文面を翻刻し紹介する。

#### 一通目

##### （宛先名）

東京市

下谷区坂本町二丁目

岡の徳之助様

##### （差出人及び日付）

越中立山室堂にて

七月廿一日朝 松次郎

#### （本文）

前略十九日午後

六時富山より六里の

途を吾峠寺迄参り

翠井日山地八里を炎

熱に耐られ午後七時

過に立山室堂に

着きました

立山は二十年來の大雪

にて満山白嶺々とし

てこれでも夏かと思

はれ候

今朝別山を越え劔

沢に露営明日劔を攀

り別山附近に露営致し

立山連峰を縦走して

又室堂へ帰るつもり

です又後便にて

## 二通目

## (宛先名)

東京市

下谷区坂本町

二丁目

岡野徳之助様

## (差出人及び日付)

立山裏剣澤の夜営地

七月廿二日 松次郎

## (本文)

拝啓本日未明出発前の目的なる剣ヶ岳を登攀して午後一時剣澤の夜営地に降り又全地に夜営します

剣ヶ岳は岩壁の壮大雪溪の急激驚くはかりて生憎頂上は濃霧で少し降つたら晴れて見晴しも少しは出来ました長次郎澤より登り平蔵澤(剣澤の内小生が

始めて降りしもの)

を降りました 平蔵澤の

雪溪の降り口が非常に悪し

為に十五六丈の絶壁を継々に縄で降りましたいやもつ下

から見たらゾットしました

明日は朝より別山。真砂、富士ノ

折立、大汝雄山を極め直

に温泉へ降りるつもり

です 左様なら

一通目は、七月二日に室堂から発信したもので、剣岳登山の前日までの様子が窺える内容である。満山白嶺々とは大げさな表現とも思われるが、二十年來の大雪とあるように立山は余

程残雪が多かったのであろう。二通目は、翌二三日に剣沢の野営地から発信されたもので、剣岳登頂以降の様子が窺える内容となつてゐる。濃霧の中でとつた平蔵谷への降りルートの険しさについては大変リアルティが感じられる描写となつてゐる。葉書は小屋の人か歩荷の人などに托したのであろうか。

この時の山行は山岳第一〇年第一号に「剣ヶ岳登山記(長次郎谷を溯り平蔵谷を降る)」として紀行文が発表されたが、紀行文によつてあらためて登山行程を確認したい。岡本への葉書にもあるように七月一九日信越線經由で富山駅に降り立つた松次郎は、人力車で上瀧へ向かい、その日は芦峰寺の佐伯平蔵宅に宿泊する。翌二〇日には佐伯平蔵・国蔵をともにブナ坂を経由し室堂まで行く。二一日には室堂から剣澤乗越を経由して長次郎澤手前で幕営。そして、二二日には剣岳登頂を果たし、平蔵谷を降りて前日の幕営地へ還る。翌三日には別山から雄山を縦走し、正午前に室堂に到着したところで紀行文は終了している。

余談であるが、松次郎はこの頃山行先から岡本徳之助に盛んに葉書を出している。たとえば、現在の剣岳早月尾根を初登した大正六年(一九一七)七月の山行(これは「山岳第一三年第一号」に「剣越え」として紀行文が掲載された)と、初めて立山から黒部川御山谷に降りた大正七年(一九一八)七月の山行(これは後に随筆集『破片岩に「御山谷」として収められた』の際に旅先から出された葉書が日本山岳会に保存されている)。

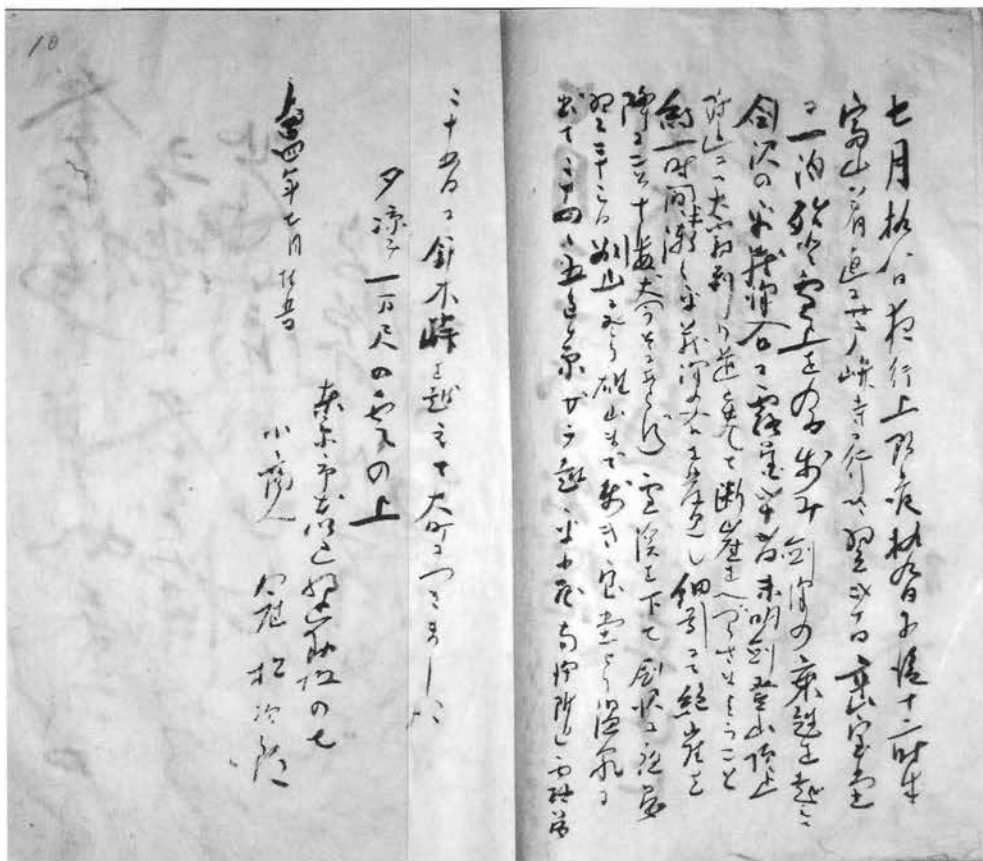
今回の山行はよほど感激したのか、登山中に二通も出され、生き生きとした登山の様子が感じられる内容になつてゐる。ところで、松次郎の晩年に出版された全集『山溪記』第一巻所収の

「平蔵谷の初降の冒頭には当時百瀬慎太郎から剣岳登頂者としては二番目くらいと示唆されたことが追憶として記されている。筆者はこの文を初めて読んだ際に確か大町を経由しない山行はすなわで少々違和感を覚えた。

## 對山館に残された記録

かつて筆者は市立大町山岳博物館で大正四年(一九一五)から大正二一年(一九三二)にかけ

て對山館の宿泊者が記入した雑記帳を見る機会があつた。雑記帳は慎太郎の内孫で、針木小屋主人百瀬堯氏が保管している。その中には大正四年(一九一五)七月二十五日に松次郎が記したものが綴じ込まれていた。大正四年(一九一五)七月といえは、先述した剣岳を登つた際の山行である。以下その部分の写真を示すとともに文面を翻刻し紹介する。



對山館の「雑記帳」に書きつけられた冠松次郎の記録

百瀬堯氏蔵



七月拾八日夜行上野発拾九日午後十二時半  
富山に着直に芦峯寺に行き翌十日立山室堂  
に一泊殆と雪上をのみ歩み剣沢の乗越を越して  
剣沢の平蔵澤入口に露営式十式日未明剣登山頂上  
附近にて大霧到り道を巻いて断崖をへつりさまようこと  
約一時間半漸々平蔵澤の入口を発見し細引にて絶崖を  
降ること十萬丈(うそにあらず)雪溪を下て剣沢に夜営  
翌二十三日別山に登り雄山まで歩き室堂より温泉に  
出て二十四は五色ヶ原ザラ越平小屋御澤附近露営  
二十五日に針木峠を越えて大町につきました  
夕涼み一万尺の雲の上

東京市本郷区駒込動坂の七  
小商人 冠 松次郎  
大正四年七月廿五日

この史料は、先の岡肇徳之助に出された葉書  
二通に続いて、山行の途中というが終了点で書  
かれた第三番目の記録である。充実した山行が  
無事に終わり記念にしたかったのか、力強い筆  
致で一気呵成に記されており、冗談を交え多少  
誇らし気である。気持ちが高揚したのか俳句ま  
で添えられている。小商人とは何とも謙遜した  
表現で、質屋の主人であった松次郎らしい如才  
なさが感じられる。

登山の行程は先の岡肇に出された葉書の内容  
とも概ね符合している事が分る。そして、何よ  
りもこの資料から先の『山岳』に記された登山  
終了点である室堂以降の松次郎の足取りが判明  
した。当時の山行形式では芦峯寺の案内人を  
雇っており富山下山することが普通であった  
と思われる。筆者も当初は富山へ降りたものと  
ばかり思っていたのだが、この資料から室堂か  
ら温泉(立山温泉か?岡肇への葉書にもあり)  
へ行き、ザラ峠・五色ヶ原を経由しつつ黒

部川本流に降り、針木峠を登り  
返し箆川谷から大町に出る下山  
コースをとったのであった。如  
何にも健脚の松次郎らしいコー  
ス選択とも思われる。

何故このコースを選んだのか  
について松次郎の真意は不明で  
あるが、当時立山軽便鉄道は滑  
川駅・五百石駅間が大正二年  
(一九一三)六月に開通したば  
かりで、立山駅(現在の岩峯寺  
駅)までの延伸は大正一〇年  
(一九二一)三月まで待たねばな  
らなかつた。故に帰りの足のこ  
とを考えると、必ずしも絶対的  
な下山コースとはいえなかつた  
のかもしれない。

しかしながら、このことはその後続く、黒  
部川への探検の序章としていささか興味深いこ  
とである。今まで登山史の研究で伝えられてい  
たことでは、大正五年(一九一六)七月に行わ  
れた岩井谷を遡り薬師岳登頂を果たした山行や  
その翌年七月になされた剣岳早月尾根の初登頂  
後に槍ヶ岳まで縦走した際に初めて黒部川への  
覚醒がされたことになっている。ところが、そ  
れらの山行以前にその伏線ともいえるべき登山が  
あり、黒部本流の岸辺に降り立っていたのである。  
黒部の流れを見て如何なる感興を催したかは  
不明だが、一つの登山で紀行文も含めてこれ  
ほど多くの山行記録を残した例は珍しく、この  
登山が松次郎に非常に大きな印象を与えたもの  
であったことは疑いがないと思われる。

## おわりに

筆者は、平成二年(二〇〇〇)に勤務先で  
ある東京都北区の博物館で没後三〇年を記念し  
て「岳人冠松次郎―その生涯とアルピニズム」  
と題する特別展を企画実施したことがあった。  
その時には主に松次郎の三〇冊にも及ぶ著書な  
ど活字にされた文献に依る所が大きかったが、  
本稿で紹介したように、印刷物だけでは明らか  
にできない山行内容があることが分った。対山  
館に残された史料から先に紹介した『山溪記』  
第一巻「平蔵谷の初降」の冒頭で百瀬慎太郎か  
らの示唆を付加した意味が解けたような気がす  
る。下山後に対山館を訪れた際に慎太郎から伝  
えられたのではないかと思われる。平蔵谷の初  
下降にもみられるように松次郎も他の岳人と  
同様初登攀に拘っていたようだ。昭和四一年  
(一九六六)一月に名著刊行会から出版された  
『黒部統篇』に収められた「私の初登攀メモ」  
には二六の登山路について記されているが、筆  
頭に「平蔵谷を降る」があげられている。剣岳  
登頂については二番目くらいであった。しか  
し、平蔵谷の下降や早月尾根など剣岳の未開拓  
の登山路に情熱を傾けた松次郎であった。そし  
て、その後は黒部溪谷の遡行に精を出し始め  
た。夏期はもっぱら谷歩き、秋期は後立山から  
東信道路など黒部へアプローチするように  
なり、大町対山館を経由することも次第に増え  
ていった。機会があれば、後立山の山行時にお  
ける対山館との関わりについても記してみたい  
と思う。

最後に、対山館の史料閲覧の便宜を図って  
いただいた関根忠志市立大町山岳博物館学芸員と史  
料を読み合わせいただいた田中葉子北区文化財  
専門員に御礼申し上げる。

## 主要参考文献

- 冠松次郎 祖父母伝  
『山岳』第七年第一号  
明治四五年(一九二二)五月 日本山岳会
- 冠松次郎 剣ヶ岳登山記  
『長次郎谷を遡り平蔵谷を降る』  
『山岳』第一〇年第一号  
大正四年(一九一五)二月 日本山岳会
- 冠松次郎 岩井谷と薬師ヶ岳  
『山岳』第二一年第二号  
大正七年(一九一六)二月 日本山岳会
- 冠松次郎 剣越え  
『山岳』第三年第一号  
大正七年(一九一八)二月 日本山岳会
- 冠松次郎 御山谷  
『破産者』  
昭和八年(一九三三)六月 耕進社
- 冠松次郎 私の初登攀メモ  
『黒部統篇』  
昭和四一年(一九六六)二月 名著刊行会
- 冠松次郎 平蔵谷の初降  
『山溪記』第一巻  
昭和四一年(一九六六)二月 名著刊行会
- 冠松次郎 御山谷を下る  
『山溪記』第二巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第一巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第二巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第三巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第四巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第五巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第六巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第七巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第八巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第九巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第十巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第十一巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第十二巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第十三巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第十四巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第十五巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第十六巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第十七巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第十八巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第十九巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第二十巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第二十一巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第二十二巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第二十三巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第二十四巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第二十五巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第二十六巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第二十七巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第二十八巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第二十九巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第三十巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第三十一巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第三十二巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第三十三巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第三十四巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第三十五巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第三十六巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第三十七巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第三十八巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第三十九巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第四十巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第四十一巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第四十二巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第四十三巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第四十四巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第四十五巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第四十六巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第四十七巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第四十八巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第四十九巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第五十巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第五十一巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第五十二巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第五十三巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第五十四巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第五十五巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第五十六巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第五十七巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第五十八巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第五十九巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第六十巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第六十一巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第六十二巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第六十三巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第六十四巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第六十五巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第六十六巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第六十七巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第六十八巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第六十九巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第七十巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第七十一巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第七十二巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第七十三巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第七十四巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第七十五巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第七十六巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第七十七巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第七十八巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第七十九巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第八十巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第八十一巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第八十二巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第八十三巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第八十四巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第八十五巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第八十六巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第八十七巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第八十八巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第八十九巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第九十巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第九十一巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第九十二巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第九十三巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第九十四巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第九十五巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第九十六巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第九十七巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第九十八巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第九十九巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社
- 冠松次郎 山溪記第一百巻  
昭和四一年(一九六六)二月 春秋社

(北区飛鳥山博物館学芸員・  
日本山岳会資料映像委員)

山と博物館 第57巻 第4号

発行 千 長野県大町市大町八〇五六一  
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六二二二二二二二  
FAX 〇二六二二二二二二二

E-mail: smpaku@city.omachi.nagano.jp  
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpaku/

印刷 株式会社 印刷  
定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇七二二二二二